

令和 4 年 9 月 28 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2021

課題番号：15K16728

研究課題名（和文）ルクセンブルク語における動詞類の網羅的な体系記述 形態・統語・意味論的観点から

研究課題名（英文）Description of Verbs in Luxembourgish - From the Aspects of Morphology, Syntax, and Semantics -

研究代表者

西出 佳代 (Nishide, Kayo)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：90733311

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ語の一方言から1984年にルクセンブルク大公国の「国語」へと昇格を果たしたルクセンブルク語は、言語としての歴史だけでなくその研究の歴史も浅い。本研究は、詳細な個別研究を行うための足がかりとして、ルクセンブルク語の文法体系全体を俯瞰する記述を行うことを目指している。本プロジェクトは、大きく音韻、動詞群、名詞群の三部に分けてルクセンブルク語全体を記述するという大きなプロジェクトの中の第二部、動詞群の体系記述を扱ったものである。ルクセンブルク語における動詞群の特徴について、方言地理学、歴史比較言語学、形式意味論、生成文法の理論や方法論を用いて、形態論、統語論、意味論的観点から記述を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語方言地理学の分類では西中部ドイツ語の中の西モーゼルフランケン方言に分類される同言語は、西ゲルマン語全体の方言連続の中間に位置しており、西ゲルマン諸語の通時的な変化を観察する上でも非常に重要な示唆を与えてくれる言語である。また、方言から昇格した拡充言語として国際的な認知が求められる中、その文法体系を適切にまとめた専門文献は現地でも少ない。国内外に欠けている俯瞰的な視点からルクセンブルク語の記述を行うことは、ドイツ語研究やゲルマン語研究をより充実・発展させるものであるとともに、新たに生まれた少数言語の国際的な認知に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：Luxembourgish, one of the West Central German dialects, promoted in 1984 to the "National Language" of the Grand Duchy of Luxembourg, begun only recently to attract attention of linguistic researchers. To study each individual linguistic phenomenon, an overview of this language is required.

This project is the second part of my investigation that consists of descriptions of (1) the phonology, (2) the verbs, and (3) the nouns of Luxembourgish. I tried to describe some significant morphological, syntactic, and semantic features of Luxembourgish verbs with the methodology of dialectology, comparative linguistics, formal semantics, and generative grammar.

研究分野：記述言語学

キーワード：ルクセンブルク語

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語の一方から 1984 年にルクセンブルク大公国の「国語」へと昇格を果たしたルクセンブルク語は、言語としての歴史だけでなくその研究の歴史も浅い。ドイツ語方言地理学の分類では西中部ドイツ語の中の西モーゼルフランケン方言に分類される同言語は、西ゲルマン語全体の方言連続の中間に位置しており、西ゲルマン諸語の通時的な変化を観察する上でも非常に重要な示唆を与えてくれる言語である。また、方言から昇格した拡充言語として国際的な認知が求められる中、その文法体系を適切にまとめた専門文献は現地でも少ない。詳細な個別研究に取り組む前に、まずは言語全体を俯瞰できるような体系記述を行う必要があった。

2. 研究の目的

本プロジェクトは、大きく音韻、動詞群、名詞群の三部に分けてルクセンブルク語全体を記述するという大きなプロジェクトの中の第二部、動詞群の体系記述を扱ったものである。博士論文で扱った音韻記述に続き、本プロジェクトではルクセンブルク語の動詞群を取り上げ、それに関連する形態、統語、意味的な特徴をまとめた。各研究成果の発表は個別現象を扱ったものにはなかったが、国内外に欠けている俯瞰的な視点から体系的な記述を行うことを目的として行ったのが本プロジェクトの特徴である。

3. 研究の方法

ルクセンブルク語における動詞群の特徴について、方言地理学、歴史比較言語学、形式意味論、生成文法の理論や方法論を用いて、形態論、統語論、意味論の観点から記述を行った。ドイツ語方言であった時期、特に 18 世紀以前の資料は限られているが、ドイツ語やオランダ語等の周辺の西ゲルマン諸語と比較・対照しながら、通時的な変化についても考察を加え、ルクセンブルク語の特徴を浮き彫りにした。

4. 研究成果

2015 年度は、ルクセンブルク語における動詞について、形態論の観点から記述及び分析を行った。他の西ゲルマン語と同様、ルクセンブルク語における動詞にも不定詞、分詞、定動詞の形式があり、定動詞は人称・数・時制・法により屈折する。また、屈折に際しては、語幹が母音交替 (Ablaut) や変母音 (ウムラウト) を示す。本研究では、ルクセンブルク語における動詞屈折の際の語幹母音の特徴や、接頭辞および接尾辞の脱落などの現象を観察した。また、同言語において進む通時的言語変化の一つ「過去形の衰退 (Praeteritumschwund)」を特に取り上げ、2015 年 2-3 月に行った調査結果を元にその実態を記述・分析した。

2016 年度は、主に論文等で前年度までの研究テーマの中の大まかに 2 つ、動詞屈折の際の母音交替に関する重要な特徴と形態統語的な現象である過去形の衰退という現象を取り上げてまとめることができた。これらの論文により、まずルクセンブルク語の動詞屈折において (1) 2, 3 人称単数現在におけるウムラウトの一般化が進んでいること、(2) 過去形において統一語幹母音 lux. -ou- の一般化が進んでいること、(3) 過去分詞では、通時的な母音体系の変化や多くの逆ウムラウトの存在によって、非常に様々な母音交替が観察されることという特徴を示すことができた。ルクセンブルク語は、その動詞屈折体系において、文法情報を明示する形態的手段としての母音交替を特に発展させた言語の一つと言える。その中でも興味深いのが、(2) の過去形における統一語幹母音 lux. -ou- の存在にもかかわらず、過去形の衰退、すなわち過去形が屈折体系から失われる変化が進行していることである。2015 年の調査結果をもとに、現在のルクセンブルク語において過去形が保たれる傾向にある動詞には、姿勢動詞や言説に関わる動詞など、一定の特徴を共有する動詞であることを示すことができた。口頭発表では、意味的な言語変化に焦点を置き、多機能の助動詞 lux. ginn 及び推量の助動詞 lux. wäerden/wäerten (以下、wäerden) の文法化を中心に研究を進めた。lux. ginn がなぜ多くの機能を有するに至ったのか、またなぜその全てを共時的に保持することができているか解明すること、未来時制を表現する助動詞としても使用される lux. waerden の詳細な機能分析・記述などが課題として残った。

2017 年度は、多機能動詞の lux. ginn および推量の助動詞 lux. wäerden に焦点を当てて、詳細な分析を行った。まず、前年度の成果を受けて、多機能動詞 lux. ginn の記述を行なった。授与動詞としての用法に加え、存在動詞、起動相のコピュラ動詞としての用法が本動詞の用法として挙げられる。さらにコピュラ動詞から発展させた受動の助動詞、迂言的接続法の助動詞、願望の助動詞としての用法がある。本研究では各用法について詳細に記述を行ったのち、先行研究を踏まえて文法化のプロセスについても考察を加えた。次に、前年度の課題として残った lux. wäerden の詳細な音韻・形態・機能的特徴の分析を行った。(1) 語中の歯茎閉鎖音が無声音の変種 lux. wäerten という変種を有することに関する音韻的な特徴、(2) 標準ドイツ語の同根語とされる強変化動詞 dt. werden が示す母音交替を lux. wäerden は示さない、さらに話法の助動詞と同様、1/3 人称単数においてゼロ語尾が現れるという 2 つ

の形態的な特徴および(3)標準ドイツ語の多機能動詞 *dt. werden* に対して機能が限られている、すなわち不定詞を支配する推量の助動詞としての用法しか観察されないという機能面での特徴に着目した。*lux. wäerden/wäerten* という 2 つの形式を変種として有するルクセンブルク語の動詞を、一義的に標準ドイツ語の *dt. werden* の同根語として扱う従来の研究に疑問を呈するもので、上記の 3 つの特徴を精査し、通時的な視点を取り入れることによって、2 つの変種が 2 つの別個の動詞、すなわち標準ドイツ語の *dt. werden* に当たるコピュラ動詞と *dt. werten* 「評価する」に当たる評価動詞に由来する可能性を指摘した。

2018 年度は、本来であれば本研究プロジェクトの最終年度であったが、研究代表者の産前産後休暇及び育児休業取得や体調面での都合上、研究計画を大幅に変更した(2018 年 11 月 20 日～2020 年 3 月 31 日の間、プロジェクトを中断)。

2018 年度は主に一次資料のデータ入力や分析、参考文献の精読、メール等による母語話者へのパイロット調査を行った。分析を行った一次文献は、ルクセンブルク国内の多くの賞を受賞するなど母語話者からの評価が高いルクセンブルク語現代作家の一人 Jhemp Hoscheit の作品や、19 世紀のものではあるがルクセンブルク各地方の方言が使用される Michel Rodange の作品 “Renert” (1872)、通時的な分析も視野に入れるために扱った 13 世紀後半の叙事詩 “Yolanda von Vianden” である。2018 年度に扱う予定だったテーマは、文末(右枠)における動詞群の語順であった。ルクセンブルク語の文末における動詞群は、過去分詞を支配する助動詞は常に過去分詞に後続するが、不定詞を支配する助動詞は不定詞に後続する語順だけでなくそれに先行する語順も許容される。この現象を、何を支配する助動詞であっても常に後続するドイツ語や、常に先行するオランダ語など、他の西ゲルマン語と比較・対照するため、これらの言語やその方言についての文献を中心に、類似の統語現象や関連すると思われる現象を扱った文献の精読を行った。また、ルクセンブルク語語学教師や翻訳家などを職業とする母語話者に対して、同現象に関するパイロット調査を行った。

産前産後休暇及び育児休業を経た 2020 年度は、本プロジェクトの最終年度の研究課題に再度取り組んだが、新型コロナウイルス感染症の影響によりやはり計画を変更し、プロジェクトを延長することとした。2020 年度は、まず 2018 年度に扱う予定であった文末における動詞群の語順を扱った。ルクセンブルク語の文末における動詞群は、過去分詞を支配する助動詞は常に過去分詞に後続するが、不定詞を支配する助動詞は不定詞に後続する語順だけでなくそれに先行する語順も許容される。この現象を、何を支配する助動詞であっても常に後続するドイツ語や、常に先行するオランダ語など、他の西ゲルマン語と比較・対照するため、これらの言語やその方言についての文献を中心に、類似の統語現象や関連すると思われる現象を扱った文献の精読を行った。また、ルクセンブルク語語学教師や翻訳家などを職業とする母語話者に対して、同現象に関するパイロット調査を行った。コロナ禍で海外出張が叶わず現地調査ができなかったため、急遽、研究テーマをルクセンブルク語と標準ドイツ語の話法の助動詞の比較に切り替えた。2017 年度に扱った多機能の助動詞 *lux. ginn* を研究する中で、両言語における助動詞の意味領域が大きく異なることが明らかとなったためである。そのため、助動詞の問題を扱うこととした。特に注目したのは、推量、認識に関わる助動詞群の意味領域である (*dt. werden/würde, mögen, können; lux. géif, kënnen*)。2020 年度は通時的な観点で分析を行った。

プロジェクトの最終年度に当たる 2021 年度は、まずルクセンブルク語における話法の助動詞に焦点を当て、その意味領域を整理した。方言地理学的にはドイツ語西モーゼルフランケン方言に属する同言語には、まず標準ドイツ語の *mögen* の同根語がない。その本動詞的な用法は *lux. gär hunn (dt. gern haben)* が担い、推量の助動詞としての用法は *lux. kënnen (dt. können)* や *lux. wäerten (dt. werden)* が担っている。後者は、推量の助動詞としてしか用いられず、*dt. werden* が有する本動詞「...になる」という意味は *lux. ginn (dt. geben)*、標準ドイツ語では *dt. werden* の接続法過去形 *dt. würde* が担う助動詞としての役割は、*lux. ginn* もしくは *lux. goen (dt. gehen)* の接続法過去形 *lux. géif (dt. gäbe)/géing (dt. ginge)* が担っている。*lux. dürfen (dt. dürfen)* は、疑問文や否定文でしか用いることができず、*dt. dürfen* の否定と同様、禁止を意味する。標準ドイツ語の *dürfen* は、肯定文では許可の意味を担っているが、ルクセンブルク語では許可を表すためには *lux. kënnen* が用いられる。*lux. müssen (dt. müssen)* は、標準ドイツ語と同様、肯定文では強制を意味する。「強制されていない」という意味での「...しなくて良い」が *lux. müssen* の否定で表現されるのに対し、「必要がない」という意味での「...しなくて良い」は *lux. brauchen (dt. brauchen)* の否定で表現される。これは、他の話法の助動詞と異なり、不定詞標識 *ze* を伴う不定詞を必要とするが、その屈折語尾は話法の助動詞と同様の特徴を有している(1/3 人称単数において無語尾となる *lux. ech/hie brauch (dt. ich brauche / er braucht)*)。また、プロジェクト全体の総括を行った。

感染症のパンデミックなどの不測の事態もあり、当初の計画通りに進められなかった部分もあるが、研究の進捗や研究成果に応じて随時計画に変更を加えながら、また現地の母語話者とコンタクトを取りながら研究を進めることができた。ルクセンブルク語の動詞群を俯瞰してその体系をまとめるという本プロジェクトの目的は達成されたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西出佳代	4. 巻 44
2. 論文標題 ルクセンブルク語における多機能動詞 lux. ginn (dt. geben)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 194-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西出 佳代	4. 巻 46
2. 論文標題 ルクセンブルク語における過去形の衰退 音韻的・形態的観点からの一考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『国際文化学研究』	6. 最初と最後の頁 29-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西出 佳代	4. 巻 16
2. 論文標題 ルクセンブルク語の動詞屈折におけるウムラウトとアブラウト	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『Sprachwissenschaft Kyoto』	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西出佳代	4. 巻 12
2. 論文標題 ルクセンブルク語における動詞の屈折体系概観	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 68-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 西出佳代
2. 発表標題 ルクセンブルク語における推量の助動詞 lux. waeerden
3. 学会等名 日本歴史言語学会2017年大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西出 佳代
2. 発表標題 ルクセンブルク語における完了表現の文法化と動詞の過去形
3. 学会等名 第65回ベルギー研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西出 佳代
2. 発表標題 ルクセンブルク語における lux. ginn (nhd. geben) の文法化 lux. ginn の多機能性と文法化の過程
3. 学会等名 第221回阪神ドイツ文学会研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西出 佳代
2. 発表標題 Systematesch Beschreiwung vum verbale Grupp am Letzebuergeschen
3. 学会等名 ルクセンブルク大公国研究所 (Institut grand-ducal) 例会 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西出 佳代
2. 発表標題 lux. waerten (nhd. werden), lux. geif (nhd. gaebe), lux. kennen (nhd. koennen) の機能と意味領域
3. 学会等名 ドイツ文法理論研究会2017年度秋季研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西出佳代
2. 発表標題 ルクセンブルク語における過去形の衰退
3. 学会等名 2015年度ドイツ文法理論研究会春季研究発表会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Kayo Nishide
2. 発表標題 Praeteritumschwund im Luxemburgischen - Umlaut und Ablaut der luxemburgischen Verben -
3. 学会等名 Sommerakademie "Deutsche Linguistik" (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 西出佳代
2. 発表標題 "Bremseflexion" ? ルクセンブルク語の動詞過去形における統一幹母音と過去形の衰退
3. 学会等名 第16回ルクセンブルク学研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 西出佳代
2. 発表標題 ルクセンブルク語の動詞屈折における Umlaut と Ablaut
3. 学会等名 2015年度日本独文学会京都支部秋季研究発表会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 西出佳代	4. 発行年 2015年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 258
3. 書名 ルクセンブルク語の音韻記述	

1. 著者名 河崎靖、大宮康一、西出佳代	4. 発行年 2015年
2. 出版社 大学書林	5. 総ページ数 188
3. 書名 ゲルマン語基礎語彙集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------